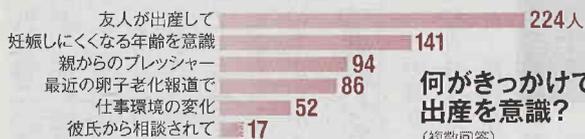
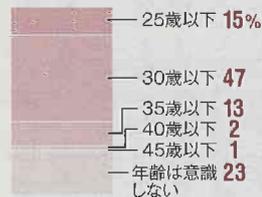


独身女性503人  
出産倫理に関するアンケート



産みたいと思ったことがある人が答えました  
本来はいつまでに産みたかった？



「精子が若ければ産める確率が  
既婚女性には、  
周囲も態度が一変した。知人の  
「卵老化」に関連する報道の影響で、  
昨年から増えている「卵老化」

人生は計画通りでない

「そんなことまでして、産まなければならぬのか」  
見るたびに、疑問が過る。  
望者が殺到しているニュースを  
体異常を調べる出生前診断に希  
加齢に備えて卵子凍結が容認さ  
られるという報道や、胎児の染色  
体異常を調べる出生前診断に希  
望者が殺到しているニュースを  
見るたびに、疑問が過る。  
「そんなことまでして、産まな  
ければならぬのか」

将来出産したい？

	全体	20代後半	30代前半	30代後半	40代前半
ぜひしたい	21%	33	26	14	10
できれば	34	33	38	37	29
あまりしたくない	20	18	17	20	27
全く	25	18	19	29	34

「したい」人が  
答えました  
なぜ？  
(3つまで選択)

「したくない」人が  
答えました  
していないのは  
なぜ？  
(3つまで選択)

「したくない」人が答えました  
なぜ？ (3つまで選択)



何がきっかけで  
出産を意識？  
(複数回答)

彼氏は  
いる？



卵子老化報道を  
どう思う？  
(2つまで選択)

都内の小学校教諭の女性(35)  
は、子どもが好きで、いつか自  
分の子どもを育ててみたいと思  
ってきた。20代で仕事を始めた  
ころは、漠然と35歳ぐらいまで  
に産んでいる自分を想像してい  
た。

思い始め、そういう人生も悪く  
ないと思ってきた。親戚に子ど  
ものいない夫婦がいるが、幸せ  
そうだ。  
だが、最近では心穏やかではい  
られない。独身女性にも将来の  
加齢に備えて卵子凍結が容認さ  
れるという報道や、胎児の染色

産む技術の進歩と倫理  
どしままでして  
産みたいですか  
卵子凍結、出生前診断……。  
出産に関する医療技術が、堰を切ったように解禁されている。  
技術はどこまで認められるべきなのか。  
私たちはどう向き合ったらいいのか。 編集部 木村恵子、塩月由香 ライター 古川雅子

## 卵子凍結したい？



## 不妊治療を受けても出産したい？



上がるらしいから、若い子探さない」とアドバイスされ、これまで口うるさく言わなかった母親まで結婚をせかすようになった。「仕事の目標を達成するまでは結婚しない」と宣言していた同年代の友人までもが、「37歳までに会って、38歳までに産む」と言い出した。だが、思う。「何歳までにあれをする、これをするって、人生そんなに計画通りに進むのだろうか」

「最も計画ができないのが妊娠や出産だろう。それなのに、医療技術で、未婚のうちに卵子凍結までするのはどうしても無理があるように思えてならない。ほかの人の選択を否定も肯定もしないが、自分は卵子を凍結しない。そう決めている。日本生殖医学会は8月、今まではがん患者などに限られていた卵子凍結について、健康な独身女性が増えることにより「卵子老化」に備えるために行うことを容認する方針を打ち出した。独身女性に新たな選択肢を与えることは一見歓迎すべきことにも思えるが、前出の女性のように、「子どもがいない人生」を受け入れようとしていた人たちにとって、迷いを増やすものでもある。そのほかにも、今年4月から簡易的に行える出生前診断がスタートした。今月には、さらに

## 「凍結したい」は9%

この動きに対して、日本産科婦人科学会で倫理委員長も務めた、落合和徳・東京慈恵会医科大学教授（産婦人科）はこう断言する。「決して、ハードルを下げて一般的に広く技術を利用することを促すのが目的ではない。水面下で無秩序に利用されることの弊害を避け、どのように技術を利用するのがいいか、倫理的な問題も含め研究、検証していきたいという狙いがある」

生殖医療技術が進む中で、当事者である女性たちは何を感じているのだろうか。アエラは、低価格で、年齢制限もない検査が一部の医療機関で始まる予定で、急速に一般に広がる可能性もあるという。高齢妊娠が増える中で、医療技術を使って、少しでも多くの人が健康な子どもを産めるように、という動きに拍車がかかっているように映る。

「絶対」を求めてしまう  
都内のメーカーで働く既婚女性29は、2度の流産経験があり、かかりつけの産婦人科では「体外受精をすれば、妊娠の確率は相当高まる」と言われたことがある。それでも今も将来も、体外受精をするつもりはない。「医療技術を使ったからといって、絶対産めるというわけではない。私自身の流産も思ってもいなかったことで、出産では何が起るかわからない。それなのに医療技術に頼れば、『絶対』を求めてしまいう。きつと、子育てだって思うようになる。この連続。産む時点で絶対や完璧を求めたら、何か規格通りに物を作るような感覚になってしまいう。一方、技術を歓迎する声もある。30代の派遣社員女性は、卵子凍結が学会のお墨付きを得たことを喜ぶ。

「後ろめたいことをするわけじ

## 独身女性の思い

### 結局「産まない」ことを選択する人間は肩身が狭い。自分なりにいろいろ考えて、判断したことなのに。子どもを産まない女には価値がないと言われているように感じる。それも仕方がないのかもしれないけれど

(44歳、パート・アルバイト、彼氏あり、全く出産したくない)

欲しくても自然にできない人のことを思うと、自分たちの世代は医療でどうにかなるからありがたいと思う

(29歳、会社員、彼氏あり、ぜひ出産したい)

未婚・離婚問題と給与問題も同時に改善しないと、医療が整っても意味がないのでは、と思ってしまう

(30歳、無職、彼氏なし、ぜひ出産したい)

卵子凍結は「製造」っぽい。違和感がある。でも子どもが欲しいと思ったときの保険としてはありかもしれない

(33歳、パート・アルバイト、彼氏なし、できれば出産したい)

卵子凍結はいまさらだと感じる。20代のうちにやるものだと思っている

(37歳、パート・アルバイト、彼氏なし、あまり出産したくない)

女性の社会進出が少子化・高齢出産の一因のように思う。無理に産もうと過度な医療技術に頼るのはよくないと思う。ただ、当事者になれば考えが変わるに違いない、とも思います

(35歳、会社員、彼氏なし、できれば出産したい)

そこまでして出産したいとは個人的には思わないけど、結婚する年齢が高くなっているのと、妊娠しにくい人が増えているため、不妊治療がもっと広まればいいのではと思います

(45歳、商工自営業、彼氏なし、全く出産したくない)

ある程度キャリアを重ね、高齢出産と言われる年になって、医療技術に頼るのはやむをえない

(35歳、会社員、彼氏なし、ぜひ出産したい)

自分とパートナーだけの努力でつづりたいとは思っている

(26歳、パート・アルバイト、彼氏あり、ぜひ出産したい)

医療技術が向上していくことによって、より良い治療を受けられるのはいいと思うけれど、保険が適用されず、経済的に格差が出て、選べる選択肢に差があるのは残念に思います。子どもを心から欲しいと願う方々には、相応の補助などがあっていいと思います

(40歳、パート・アルバイト、彼氏なし、全く出産したくない)

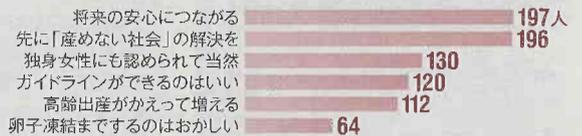
せっかく医療技術を駆使しても、安心して生活できない環境なら子どもを産むのをためらう女性も多いと思う

(26歳、会社員、彼氏あり、ぜひ出産したい)



調査は、NTTコム オンライン・マーケティング・ソリューションを通じて9月末に実施した。26～45歳の独身女性503人が回答。グラフにある「20代後半」は26～30歳、「30代前半」は31～35歳、「30代後半」は36～40歳、「40代前半」は41～45歳。グラフの%は、小数点以下を四捨五入したため、合計が100にならない場合がある

## 卵子凍結容認をどう思う？ (複数回答)



## 不妊治療の問題は？ (複数回答)



## 血液検査による出生前診断受けてみたい？



「はい」の人が答えました

## 不妊治療どこまで受ける？ (複数回答)



## 生殖医療技術の駆使をどう思う？ (複数回答)

「この時代は、自分で情報を得て、将来の幸せのために自分で備えるしかないと思います」

**独身にも産む選択肢を**

さらに、生殖医療技術を使う自由がもっと広く認められるべきだと訴えるのは、40代の会社員女性。彼女自身、まだ公的に認められていない時代に、自分で情報を探し、30代で卵子を凍結した。将来、結婚したいと思った男性が現れた時に、年齢的に出産が難しいという状況を

「現在は様々な生き方がある。最新の技術を使って、どんな生き方を選択する人でも子どもを持つ可能性を増やすことが、現実合っているのではないでしょう」

「この時代は、自分で情報を得て、将来の幸せのために自分で備えるしかないと思います」

「この時代は、自分で情報を得て、将来の幸せのために自分で備えるしかないと思います」

「この時代は、自分で情報を得て、将来の幸せのために自分で備えるしかないと思います」

「卵子凍結の対象を広げる前に、もっと卵子の老化などについて、啓蒙してほしい。卵子は若くても、妊娠する自分自身が老化していくことでデメリットもあることを、もっと知らせるべきだ」

(37歳・体外受精経験者)

「採卵手術でも必ずしも安全とは言えない。信頼できる技術を持つ医療機関は、日本にはそれほど多くはない」(38歳・顕微授精経験者)

「卵子凍結の対象を広げる前に、もっと卵子の老化などについて、啓蒙してほしい。卵子は若くても、妊娠する自分自身が老化していくことでデメリットもあることを、もっと知らせるべきだ」

(37歳・体外受精経験者)

「採卵手術でも必ずしも安全とは言えない。信頼できる技術を持つ医療機関は、日本にはそれほど多くはない」(38歳・顕微授精経験者)

「現在は様々な生き方がある。最新の技術を使って、どんな生き方を選択する人でも子どもを持つ可能性を増やすことが、現実合っているのではないでしょう」

「現在は様々な生き方がある。最新の技術を使って、どんな生き方を選択する人でも子どもを持つ可能性を増やすことが、現実合っているのではないでしょう」

「現在は様々な生き方がある。最新の技術を使って、どんな生き方を選択する人でも子どもを持つ可能性を増やすことが、現実合っているのではないでしょう」

## 不妊治療経験者の思い

自然に授けられない状況にあるとき、医療の力を借りて子どもを授かることができると、希望を持つことができた。ただ、治療が長期にわたると、今度はいつまで治療を続ければよいかを決断できず、どこかで線引きしてほしいという気持ちも出てきた  
(47歳/パート)

産みにくい社会、育てにくい社会を改善すべき。この点を、医療技術は決して解決できない  
(42歳/パート)

昔から、子どもは神様からの授かりものなど、神がかった感覚の人が多い。でも、妊娠は年齢を重ねるとしづらくなる上、染色体異常も増える。不妊治療も日々進化して、不妊の原因がわかる人もいる。その原因にアプローチしていくのは、妊娠出産という目的を持つ人にとっては当たり前  
(36歳/会社員)

42歳で結婚したが妊娠できず、今も不妊治療を行っている。年齢以外に今のところ不妊の原因がないので、**卵子が若かったら**と何度も思った。もし独身時代に卵子凍結できたならしていた  
(46歳/会社員)

卵子凍結することによって、妊娠・出産を後回しにする女性が増えるのは、あまり良いこととは思えない。卵子凍結したからといって、**必ずしも将来出産できる保証はない**ことに気づいてほしい  
(48歳/パート)

出生前診断については、**私は命の選別をしたくない**ので受けたくない。何度も流産や死産を繰り返した方などは、本人の希望によって行ってもいいと思う  
(40歳/主婦)

生殖医療の進歩により、病気などの事情で、これまで望みのなかった方も希望が持てることには賛成。でも、自然妊娠できる身体を持つ人が卵子凍結するのは、**何でも自分でコントロールできるという思い**がかりではないか。何人か子どもを持ち、凍結した卵子は「もう要らない」となった時、物のような感覚で処分することは、私にはできません  
(50歳/個人事業主)

卵子だけ凍結で若いままでも、**自分が年齢を重ねることで、様々なリスク**がある。若い時なら検討したかもしれないが、現在の自分はしたくない  
(37歳/個人事業主)

特に田舎は、共稼ぎじゃないと生活できないくらいの収入なので、出産して退職という流れが難しい。経済的に落ち着いたから子どもが欲しいと思った時にはじめて、不妊症だったと気づくことも多い  
(42歳/会社員)

医療技術の進歩はいいが、もっと子どもを産んで育てる責任、**命の大切さを学校教育で教**えてほしい。女性は簡単に子どもを産めるという安易な考えがなくなってほしい  
(36歳/主婦)

治療にかかる金額や期間についても、独身女性が想像している以上の現実が浮き彫りになった。35人のうち不妊治療代に300万円以上をかけている人も過半数で、500万円以上の人でも3割近くにはのぼる。期間は10年程度かそれ以上の人が、4割以上にもなった。不妊治療の間

20代の頃、自分が不妊治療をするとは思ってもみなかった。人工授精を5回試み、卵管の詰まり解消などのため腹腔鏡手術

日進月歩の医療技術や様々な

## 卵子の若さが第一関門

不妊治療という技術に望みをかけている人でさえ、「技術万能」ではないことを指摘する声がいくつもあった。

30人にのぼった。それでも、妊娠の難しさを経験するからこそ、医療技術に頼ることに肯定的な見方もあった。32歳の主婦は、不妊治療を開始して3年。これまでに、300万円ほど費やした。

「新婚の20代のうちに、卵子凍結ができていれば、どんなにかかったかと心底思います。卵子を凍結すれば必ず妊娠できるわけではないことは、十分承知していますが、卵子の若さがまず第一関門なのだ、今は思えるのです」

情報。今の時代には、妊娠や出産を考える際、情報リテラシーや倫理観が求められそうだ。岡山大学の中塚幹也教授(生殖医学)は、最近、未婚女性から「とにかく卵子凍結できる施設を教えてください」と相談を受けることがあるが、情報に振り回されないでほしいという。「ART(生殖補助医療)施設に相談するだけでは、技術ベースの話に偏りがちで、その技術を使う意味や社会的課題などが見えにくい場合もある。各都道府県にある不妊専門相談センターのような、中立な施設にアクセスして、様々な選択肢を持つことが大事です」

## 欲望とどうつきあうか

東京財団の礒島次郎(いそじま)研究員は、3年前から「生命倫理サロン」を開いている。昨秋は、新型出生前診断を取り上げ、専門医やこの問題に直面する女性、一般

の人たちと一緒に、検査技術を用いる時の倫理観などについて議論した。

「生命倫理とは、人間の欲望とどうつきあうか、ということ。自分が何をしたい、何をしたい、遠慮なく周囲に伝えていい。ただ、視野狭窄に陥らないために、社会を俯瞰する目を同時に持つことが大事。社会全体としては、個々の欲望がせめぎ合う中で、個人の選択が行き過ぎたり道を踏み外したりしないように、できるのはここまでと決めていく必要がある。より公私のバランス感覚が問われる時代になっていくと思います」

長年生殖医療に携わってきた、前出の落合教授はこう話す。

「生殖技術は10年後、技術的には今より格段に進んだことができるでしょう。ただ、『できる技術』と『使つていい技術』はイコールではないと、常に肝に銘じるべきです。倫理的ハードルはその時代の社会情勢で変わるけれど、人間も自然界の一つの生物であり、本来の生殖メカニズムで生きるといふ基本を忘れてはならない。技術を使つて、生殖できなくても思い通りにコントロールしようとするのは、人間のエゴかもしれない。もっと人は自然の摂理に対して謙虚になるべきだと思います」